

第 1 章

総論

1 総論(1) 子育ての基本～0・1・2歳児の子どもの発達とは

巷野悟郎

地球上には多種類の生物が生存しているなかで、人は哺乳類に属していて、生まれて最初のうちは母親の乳で育ちます。更に体温は四季を通じてほぼ一定でなければなりません。犬や馬と同じように恒温動物だからです。このように同じ生物でも、生存するために多くの条件がありますが、人には更にかなりの特徴があります。

例えば犬や馬や、密林の中の野生の猿も人と同じ哺乳動物ですが、生まれた子どもは食物を自分で探して食べます。寒ければ親に身を寄せるし、危険なら身をかくすことをします。自分で生きて行くだけの行動をとっています。

人の子どもは生まれればそのまま、空腹でも寒くても危険でも、身を守ることができないので、すべては親の手を借ります。しかし人の親はわが子を守り、育てるだけの知恵を有しているので、わが子が自立するまで、毎日の衣食住の面倒を見ます。このようなことを日本語では普通に「子育て」「育児」と表現しています。

人間は地球上の生物でも永い歴史のなかで、このような子育てをくり返しているうちに知能を獲得して、今日に至っています。

しかし太陽を中心に公転と自転を同時に繰り返す地球上の位置によっては、太陽光線や温度などが異なるので、本来の哺乳動物・恒温動物である人は、生活する場所によって、衣食住には差があります。更に日本は南北に長い島国で、周囲は海で囲まれているので、日本の育児・子育ては、外国に比較して特徴があります。更に同じ日本でも、生活する位置によって食べ物などに差があるし、子育てはその土地に根ざした昔からの習慣もあることを理解する必要があります。

子どもとは

人はほかの動物と異なって、成人に達するまでは手がかかります。少なくともからだの成長・成熟が、ある段階で自立するまでは、その時々を意識して毎日の食事や運動や睡眠などに、気を配る必要があります。そこで一般には子どもの頃からのからだの成長を身長・体重の目盛の経過で判断しています。しかしこれには個人差があるので、一律におとなと子どもの区別はできません。そこで社会的な位置づけも含めて15歳に線引きすることが多いのです。

子どもの発達——母胎内で育った胎児は、およそ280日間で平均3kgにまで成長して、生まれます。大きな産声で始めての呼吸です。それと同時に呼吸によってとりこんだ血液中の酸素

を、心臓の働きによる血液循環にのせて全身に送るという大仕事を始めます。また始めて飲んだ乳を消化吸収して、不要になった便を排泄するという事も始まるのですから、新生児期（生後4週間まで）は大変なことをしていることになります。

このような新しいからだの働きが始まるので、しばらくは様子を観察しなければなりません。そこで集団保育である保育所保育は、一般に産休明けの産後8週を過ぎたときからとなります。その頃までは飲み方も上手でないし、感染症に注意して、清潔にしてあげることが必要です。

そうしているうちにも毎日抱っこしたり、おむつを替えたり、相手をする機会が多くなるほどに、からだに力がついて、首もしっかりするようになります。

人として発達してきたという感じで、生後半を過ぎる頃になると、表情も出てくると同時に、人を区別する「人見知り」が始まったりします。

また全身に力が入るようになるとお座りをするようになり、腰がしっかりしてくると、自分で何かにつかまっの立っちが始まります。これで視界が広がると、目覚めているときはからだをよく動かして、大好きなお遊び「はいはい」も始まります。その頃から危いことが多くなるので、子どもから目を離せなくなります。

いつの間にか「つかまり立ち」が始まります。これは全身がかなりしっかりしてきたからなので、知らないうちに手を離してみたりします。不安そうにつかまってしまうけれど、繰り返しているうちに両手を離してしまうことがあります。「ひとり立ち」で、ときに親の方を見て「どうだ」とも言いたそうだけれど、途端にまたつかまったりします。

このようなことを繰り返しているうちに、何かにつかまっている手を離して、危なっかしそうに一步・二歩と足を出してみます。しかし始めから簡単にいかないから、お尻をついてしまって親の方を見ます。大きなおとなが転んだら痛かろうに、子どもは小さくまるまるしておむつもしているの、何も感じなそうにニコッとしてまた立ちあがります。

お尻をついたとき、そばにいるおとなはどんな反応か観察すると、「一、二歩しか歩けなかった」のにいやな顔をする大人はいません。みんな「歩けた」と、手をたたいて喜びます。

生まれたとき何もできなかった子どもは、ゼロから出発して、その後は自分でやってみて、失敗してもお母さんにほめられながら、2歩3歩です。

一歳を過ぎる頃になると、二足歩行が始まるので、手を使えるようになります。手は更に指の発達に及ぶから遊びは広がり、これが知能を発達させながら遊びを拡げていきます。

しかしこの頃はまだ自分という意識はなく、相手の気持ちを感じとれることもないから、すべては自分中心の行動です。そこで二足歩行が始まる頃からは、常に危険を伴っていると理解

していかなければ、いわゆる「不慮の事故」を避けることはできません。

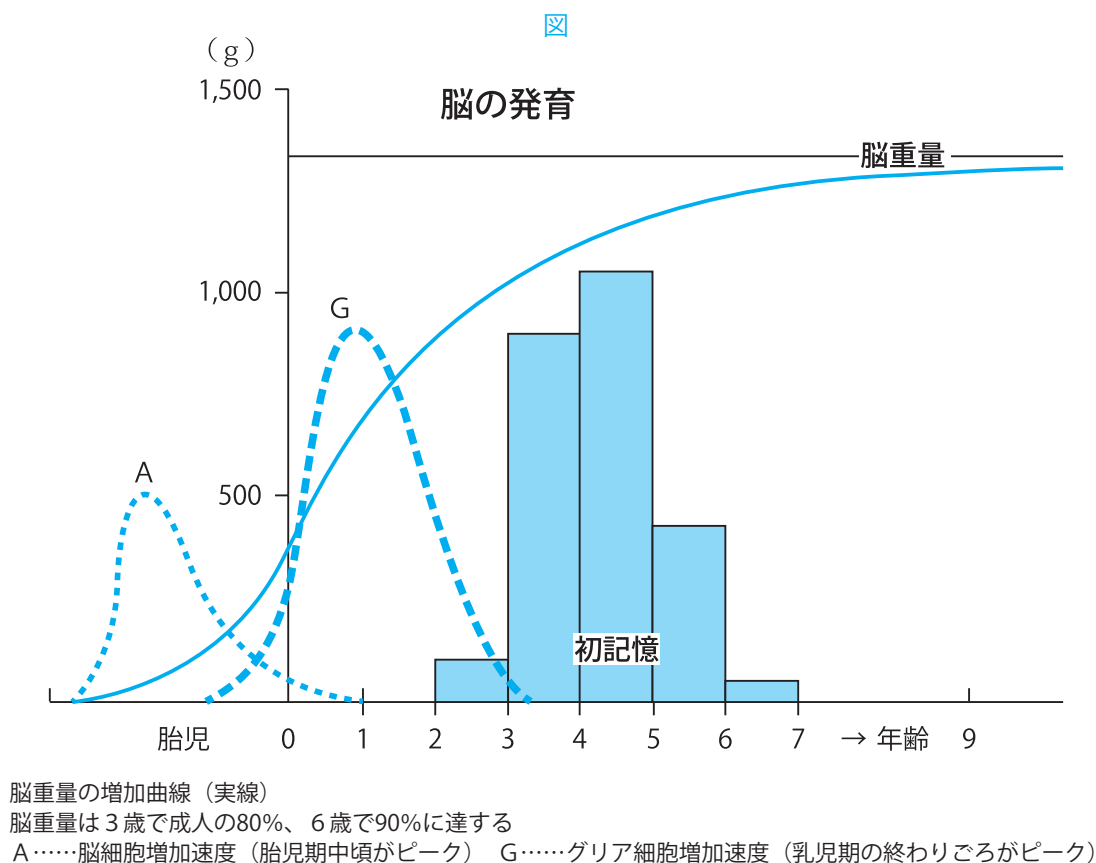
0、1、2歳と3歳からと

私達は毎日の生活で沢山のことを経験しています。そのなかのあるものは、情報として蓄えられているものがあるし、関心のなかったものは忘れられてしまうでしょう。同じようなことでも、時間の経過が永いと忘れてしまうでしょう。いずれも脳の機能による記憶で、あまり永い時間がたってしまうと忘れてしまうし、印象の強いものはいつまでも残っています。

記憶の働きで情報を貯えておき、後に再現する脳の働きで日常生活は、無意識のうちに安全な方に向き、今までの経験が人間関係をよくしたり、人を信頼するなど、集団生活の資料として活用されてきます。

それではいつ頃からこの記憶の働きが始まるのかということで、誰でも持っている古い思い出、記憶の中で一番古い記憶は何歳頃でしょうか。その内容を学生や年長者などの集団を対象にしてアンケート調査した結果が、[図](#)です。最も古いのが4歳頃、次いで3歳で、2歳は僅か、1歳、0歳はゼロと言うカーブでした。これとは別に、脳細胞数の増加や、細胞間を結ぶ神経繊維の髄鞘化の程度については、2歳から3歳の頃であることはすでに報告されています。これらは子どもの頃の記憶の傾向とほぼ同じでした。

この図から、0・1・2歳頃の記憶力は、弱いと解釈できます。



そこで2歳までの3年間は胎児・新生児期の延長で、生物的なからだの発達が中心です。先ずは生命を保つための食の摂取です。哺乳動物としての人は、生まれたそのときから母の乳という液体栄養を、新生児の口に当てると飲みます。これは生まれつき身につけている原始反射です。その他生きるための自立で、基本的なからだの働きが順を追って発達していきます。大きく分類すると次の項目が挙げられます。

- 1 食の自立と不要になった排泄物の始末（排泄の自立）
- 2 生活環境、殊に寒暖への適応
- 3 運動機能の発達
- 4 集団生活での言葉の発達

上記の発達によって、自分の健康・生命保持のための身体的条件が備わります。そしてこの頃は脳の発達は盛んだけど、まだ記憶にとどめるまででないから、おとなになったとき、子どもの頃のことを思い出すことはできません。

それは更に発達が整ってからのことで、3歳頃になると、子どものふだんの言葉は立体的になってきて、「きのう」「後で…」「あした」などの言葉が出てくることで分かります。

生まれてからその頃までは、常に「今」のことだけれど、この3歳を過ぎる頃になると、記憶力や理解が発達してきた証拠です。そして相手の気持ちが分かるようにもなり、順序が理解できて、友達との遊びも今までとは違って、ルールを守る遊びがおもしろくなったりすることでも分かります。

テレビの見方も違ってきて、「ボクもいまにサッカー選手になるのだ」と、未来を言葉にまで出してくるようになることで分かります。3歳はまさに人生への出発。教育という言葉が出てくるのもこの頃からです。

そこで0・1・2歳とは……

母親のからだの中で育つ胎児は、からだそのものの健康的発達が大事なときで、産声で生まれた新生児は、その後の0・1・2歳で、この世の中で生きていくためのからだの基礎が準備されます。そこには発達の順序があり、毎日の生活では常に新しい体験の選択です。しかもこの3年間は、自分という存在がありません。過去も未来もなく、いつも「今」の連続で、すべてが順序をふんで発達していきます。そこでその頃は常に未体験の危険が前面にあることを、おとなは理解しておかなければなりません。

それはこの頃の乳幼児は、常に新しい環境を経験しながら育っているということです。そこでどう育てるかでなく、先ずはこの頃の子どもの生活を、不慮の事故から守ってあげることによって、それによって子どもは育っていくと考えます。

私達の生活の環境は、子どもにとっては随分と危険因子が多いところです。そこで日本には

育児、子育てという言葉が、江戸時代の昔からありますが、諸外国ではそのような言葉を使っているところは少なく、baby care child careという言葉が普通です。0・1・2歳の乳幼児発達を考えれば、この言葉が適当で、その結果が「子育て」という順序。それによって心身健康な3歳児クラスへ送ることができると思います。日常の保育でも、0・1・2歳と3歳とでは、随分と違うことが感じられると思います。

0歳・1歳・2歳児はすべてがなお未熟で、将来の衣食住の自立にとって必要な、からだの発達の基礎が身につくときです。人間以外の哺乳動物は、生まれた段階で自分から行動し、身を守る働きが身に備わっているけれど、人はいつの時代からか、未熟な段階で生まれたので、生後の時間のおよそ3年間をかけて、生きるために必要なことを身につけていくのです。これは手のかかることだけれど、手のかかることだけに親と子の関係が密になり、将来に向けての心の発達を推進させるでしょう。

将来記憶に残らない生後の3年間の発達には、およそ次の項目があげられます。

1 哺乳動物にとっての食

初期の母乳栄養（液体栄養）から成人の食（例：日本食）へ移るためには、離乳食・幼児食と順を追った食が必要です。それによって3歳を過ぎる頃には、食の中が広がり、おとなの食生活に加わるようになります。

2 母乳栄養

初期の母乳栄養は、乳児にとって適した栄養であり、乳児に抱かれての授乳が子の気持ちを安定させます。（自律授乳）これを続けるうちに、授乳は昼間に集中していきます。

3 離乳食・幼児食

液体栄養から普通食まで順序を経てすすみ、3歳頃には集団の食に加わるようになります。箸の持ち方は話せばわかる3歳頃から、正しく教えましょう。

4 排泄

自然界の動物は、排泄物の臭いによって自分の存在が危険なので、早いうちから夫々の仕方があります。人は生まれてからしばらくは、濡らしてしまうだけですが、半年、1年になると、尿意や便意を感じると様子が変わるので、そのとき手をかけてあげます。教えたとき、できたときほめてあげると、やがて教えるようになり、3歳の頃には約半数くらいはおむつを必要としなくなります。

5 寒い、暑い

人は恒温動物なので、衣服で寒くなく暑くなく調節してあげます。そのとき沢山着せすぎると、体温の発散を妨げてしまうので、からだによくありません。そこでそのとき「着せるかどうか迷う程度のときは、着せない」の判断にしましょう。厚着より薄着の方が呼吸力を強くするからです。

6 運動機能の発達

産休明けの乳児、生後2カ月頃になると、抱っこしたり、おむつを替えるなどで、からだを動かしているうちに、首がしっかりしたり、手足に力が入るなどで、運動機能の発達とでも表現できるほどになります。この頃はすべてがこのような調子で、発達はからだの中心から末端へと順序をへてすすんでいき、最後は1歳頃からひとり歩きが始まります。教えなくてもいつの間にか自分で立ちあがります。

この頃からいろいろな発達——持った物を口に入れたり、危ないものを持ったり……。1歳・2歳の子どもは、ただその瞬間の遊びで先を読んでいないから、行動には常に危険が伴っています。先のことを考えないで、今の面白い楽しい遊びに没頭です。話しても注意しても理解できないので、いつも目を離すことができません。

0・1・2歳児の死亡で多い原因には「不慮の事故」があることについて、親への十分な説明が必要です。

7 言葉の発達

生まれたばかりの乳児は、何も喋らないけれどお母さんの声を知っています。母が話しかけたのと、初めての人が話しかけたのでは、乳児の反応が違うことでも分かります。そのことから子どもには、できるだけ話しかけることです。できたことはほめて、何かにつけて声をかけましょう。赤ちゃんが何か言ったら答えてあげる、それでいつのまにか子どもは、このむずかしい日本語会話が始まります。

8 そして3歳へ

0・1・2歳は何も分からないようですが、日常の多くのお付き合いをしている間に、いつの間にかいろいろなことが発達して、2歳から3歳へと何でも分かったような、夢からさめたような、はっきりしたような表情になります。

何か欲しいときに「あとで」が分かるし、友達に貸してあげたり、「明日」と時間の立体感が感じられるようになります。会話が広がっていくことで、もう3歳と感じとれる表情も何となく一段と子どもっぽくなっています。この頃、ついこの間までの赤ちゃんの頃のことを聞く

と、面白く話すことがあります。しかしこれは長く続かないで、間もなく消えてしまいます。
赤ちゃんの頃の記憶は、長く続かないようです。

2 総論(2) 現代乳幼児保育・子育ての課題

大方美香

はじめに

子育てとは一般的には、子どもの体調や健康管理に重点がおかれますが、実はその本質は子どもの成長を支えること、言い換えるなら「いのちの輝きを育む」ことではないでしょうか。子どもの成長とは身体面のみの成長にとどまらず、広く精神面の成長を含むことは今さら指摘するまでもありません。乳幼児期の認知構造、心理構造の変化はまさに劇的であり、古くから多くの心理学者や脳科学者がその成長の不思議を解明すべく研究を行ってきました。

現代社会では多くの情報が氾濫し、経済的な効率性がまず優先されていますが、実際の生きていく場面においては、何が大切か、かえって見えにくい時代でもあります。そんなめまぐるしい現代において子育て場面における、自分の目を見て、自分の手で触って、自分の肌で感じて、自分の考えで未知の世界にチャレンジする、まさに生の体験こそが実は貴重であり、その重要性は増大しています。

働く母親のワークライフバランスを考えると、子育て支援として乳幼児保育の役割は重要です。近年、乳幼児保育施策は、ともすれば待機児解消が一番のように言われます。乳幼児保育は、健康・安全に預かることだけに意味があるのでしょうか。乳幼児保育はあくまでも集団保育であり、家庭の保育とは同一ではありません。

1. 乳幼児保育の果たす役割

では、乳幼児保育の果たす役割は何でしょうか。乳幼児保育では、乳幼児は、生命誕生から間もない最初の時期に、家庭養育から長時間はなれて集団保育を受けます。このことは、乳幼児保育における乳幼児理解の必要性と課題を投げかけています。乳幼児の立場に立った保育を考えることがねらいとして求められます。

次に、発達過程における最初の時期に長時間預かる乳幼児保育は、まず何を一番大切にして保育をするかを考えることです。保育内容として何をおさえておくことが、乳幼児のこれからの人生において必要でしょうか。そのために大切な経験とは何でしょうか。特に、子育ての課題を考えながら、発達過程における最初の時期にどうしても保育者がしなければならない事項とは何でしょうか。また、乳幼児自身が自ら環境に関わって育つことは何でしょうか。無意識ではなく、このようなことを意識して保育をすることが大切です。

さらに、乳幼児保育では、未成熟で未熟な乳児が、家庭養育と乳児保育という集団保育を毎日行き来するという実態があります。また、乳児は、言葉を獲得し、社会に適応していく準備

期に乳児保育を受けます。どのような方法で乳児保育を行うことが望ましいのかを考え、子育ての課題に気づくことが大切です。乳児保育は、小学校の教科や領域のように分化していません。乳児保育は、低月齢であるほど生活や遊びが絡まっています。

乳幼児保育の子育ての課題は、①乳幼児が自己形成していく発達過程②乳幼児が大人との関係を通して言葉を獲得し、社会に適応していく保育過程③乳幼児期に身につけるべき活動経験を長期的にどのように計画するかという保育過程④大人との関わり・関係から子ども・他児との関係への過程、さらには遊び・活動への保育過程をどのように考えて乳幼児保育を計画するかです。①から④には、必ず大人・保育者が存在しますが、その立ち位置がしっかりしていないと子ども理解が混乱します。保育者の乳幼児への視点は、いつも同じ立ち位置であることが何よりも大切です。

2. 子育ての課題 —0歳児の生きる力を考える—

子育ての課題を考えると、まず、「0歳児の生きる力とは何か」を考えてみたいと思います。生きる力として、まず0歳児は、①生物体・生命体として生きている側面と②社会的に生きている側面の2つがあると考えられます。まず、①生物体として生きているということは、他の動物と同じではないということです。

0歳の子どもは五感を持って生まれ、生きている存在です。しかし、生理的早産といわれるように、人間は誕生直後、自分で起き上がることができません。軟体であった胎児が、社会的に人に出会い、抱かれ、人間として必要な運動能力である身体、すなわち筋力をつけ、自分で自分の身体を支えられるようになっていきます。環境を通してといわれるように自分自身で成長していく力を持っているのです。

生理学では、0歳の子どもはすでに生理的欲求に対して主に快・不快への表現として泣く力を持っています。泣くことで大人に表現し、泣くという行為から不快を取り除こうとする力があります。そのことが、大人が0歳に対する表現行動の原型になっており、0歳はすでに、人間としての社会的コミュニケーションを実現しているといえるでしょう。

0歳は、「言葉」という言語記号は持っていませんが、「泣く」表現によって意思伝達のツールとなる『記号』を使っていると考えられます。「この泣き方はオムツがぬれたのね」「この泣き方はいつもと違う」「この泣き方はおなかがすいたとき」というように母親はかつて乳児の泣き声で0歳の意思を判断し、コミュニケーションをとり、応答していたのです。

一方、近年は、この「泣く」ことが子育ての困難さの一因です。「なぜ泣くのかかわからない」、「何をぐずっているのかかわからない」このわからない気持ちが、子育ての課題であり子育ての支援を要する時代に大きな意味を持つと考えられます。

3. 0歳児と他者との関係

(1) 生理的欲求の満足

0歳は、エリクソンやヴィゴツキーがいうように、子どもとの信頼・情動が大切であると考えられます。0歳の乳児保育においては、情動の分化はむしろマズローがいう生理的欲求の充足によって可能となるでしょう。大人との社会的関係は生理的欲求である不快を充足するという満足にあり、そこには人間が介在する必要があります。「快—不快」は、0歳にとっては生理的欲求の満足という結果であり、0歳は生理的欲求を自ら満足するための力を持っていることに気づかなければならないのです。子育ては、この「泣く」ことへの応答から、人との関係性が育ち、人との情動交流が芽生えるのです。すなわち、人との交流という0歳児の社会的な関係が始まります。

(2) 情動の分化

情動の分化は、大人との情動のやり取りによって生まれます。0歳児は情動のやり取りこそが何よりも重要です。「あやす」ことは「愛する」が語源ですが、ここに大きな意味があります。

0歳児は社会的に生きているのです。0歳児の乳児が、泣いて特定の大人を選ぶという主体的な選択が見られます。「この人のオムツの変え方が気持ちよい（快）である」、「この人の抱っこが気持ちよい（快）である」という0歳児の情動のやり取りは、人として重要なことに気づいてほしいのです。好きな大人の声をキャッチした0歳児は、身体中を使ってばたばたとします。この「おはしゃぎ」運動は、生理的には、気持ちよい（快）という情動の表出です。しかし、大切なことは、0歳児がばたばたと身体を動かして抱っこを求める姿に大人がどのように関わるのかという人との関係です。大人があやしたり、嬉しそうな姿をすることによって、0歳児は人を求めることを覚え、人と触れ合う気持ちよさ（快）を求めてばたばたとするのです。ここに、子育ての鍵と課題があります。

(3) 他の乳幼児との出会い

乳幼児保育では、0歳児は、生後7か月頃より一人で座れるようになり、9か月頃までには、おもちゃで遊べるようになります。同時に他の乳幼児のおもちゃをさわる、取る、など一緒に過ごす中で他者とのかかわりが生まれます。この時期、保育者は、一人一人の思いを受けとめる調整役になることが求められます。

例えば、Sくんには「Yくんにかしては？」という言葉がけが必要になり、Yくんには「かしてあげてもいい？」というような両者の関係の調整が必要になります。何でも思い通りにしてきた乳児にとって、このことは大きな意味をもちます。0歳児は、気持ちよくないこと（不快）を信頼関係の中で人に受けとめてもらいながら、「思い通りにならないこと」を自己形成

の中で認知していきます。さらに、Yくんは保育者によって「よくがまんしたね（快）。」と不快を受けとめてもらうことによって快に変化していくことを認知します。また、Sくんは「かしてもらってよかったね。（快）」というように「思い通りにならないこと（不快）」は単に放置されず、新たな受容（快）に変化していくことを認知します。保育者という人との関係があってこそ、0歳児は人として人への信頼感を持ち始めていきます。

このように、0歳児はもちろんのことですが、乳幼児は保育者との情動交流や人としての関係性が芽生え育ってこそ、乳幼児同士の関係や遊びが生まれていきます。

（４）自己形成

乳幼児は、人との関係性の中で、「叱られること」と「叱られたくない自分」の違い、「かわいい自分」「ほめられたい自分」というように自己への気づきが始まります。このことは、大人との関係性や乳幼児の受けとめ方によって変化していきます。保育者の乳幼児への受けとめは、心の発達、自己形成において大きな役割を担っています。社会的責任が問われるゆえんでしょう。保育の場は、他の乳幼児と一緒に過ごすことが毎日の生活です。そのため、トラブルは多くなります。しかしながら、一歳前後の自己形成の時期に、同じ気持ちを一緒に経験できる他児の存在は大きいです。他の乳幼児と一緒にいることによって、他の乳幼児も自分と同じことをするという共同経験が培われます。「真似る」や「模倣」「見立て遊び」などはその例です。乳幼児は、他の乳幼児と出会うことから、むしろ自分自身の存在や自分以外の存在に気がきます。自分を受けとめてくれる心地よさ「快」を味わい、又自分が自分以外の存在を受けとめる心地よさ「快」をも味わっていくのです。他の乳幼児と一緒に生活する中で、一緒にいる楽しさや一緒に何かをする楽しさを味わい、人との情動交流を通して相手に伝えたいという気持ちを育んでいきます。

また、他の乳幼児と一緒に生活する中で、基本的な人との関係性や折り合いの付け方がこの時期に芽生えていきます。乳幼児の保育者は、単に世話をするという視点から脱却し、乳幼児、特に0歳児の生きる力をとらえ、0歳児が他者との社会的関係を持っているという、人との関係性に軸をおいた保育をしてほしいと思います。乳幼児は、人として誇りと自尊心を育てる時期だと理解することです。保育者は、人との関係性を育てるために、どのような援助や関わりが役割であるかを認識してほしいと思います。乳幼児保育は「人を人間らしくする」ことである自覚こそが保育者に求められています。

（５）自己の尊厳と自信(好きな大人がいる)と他者に自己表現する(「みてみて」とアピール)

—子育ての課題—

生まれてすぐの乳児は、「ひとみしり」はまだしないが、母体を求め、鼻をひくひくと母親

の身体にすりつけ、においをかぎわけている姿が見られます。その生まれたての小さな身体の弱々しい乳児が、一体であったはずの母体を求めて懸命に鼻をすりつけ母親の身体を捜し求める姿に、思わず「いとおしい」と思う心情が発露されることもあるでしょう。母親は、その生まれて間もない乳児の行為から、生まれたわが子をいつくしみ、抱き寄せたくなる衝動にかられます。この一体感と言う感覚がヒトとしての乳児の「本当の自信」であり、弁証法的ではありますが、「つながりの中で育つ」ということです。すなわち、乳児のヒトとしての自己の位置づけはここにあり、「乳児は、ヒトとして他者の存在を認める力がある」と考えます。

①自己の尊厳と自信（好きな大人がいるって…）

それでは、9ヶ月までに育つ自信や尊厳とは何でしょうか。まず、乳児は、空腹などの生理的欲求などの感覚を「泣く」ことで訴え、自己を表現します。母親が適切に受け止め、暖かい乳房から母乳が得られ、唇を通した「触覚」という感覚から乳児に「快」という感覚が芽生えます。これが情動であり情緒です。乳児は、心（知情意）のなかでもまず、「情動・情緒」が出現することから自己の尊厳と自信が芽生えていきます。

「泣き癖がつく」ということをいまだに聞きますが、乳児にとって、「泣く」は単なる「泣く」ではありません。自己の尊厳と自信は、この「泣く」という乳児の自己表現を適切に他者に受け止めてもらうことです。「泣いたらこのヒトが受け止めてくれた」「泣いたらこのヒトが抱いていい気持ちにしてくれた」ということを乳児自身が学習しているのです。その学習によって好きな大人を選び、好きな大人との関係が「つながりの中で育つ」と考えて下さい。

極端なようですが、ミミズも自然界における生命ある存在に変わりありません。しかしながら、自己表現である「泣く」行為やそれに変わる行為はしません。自己表現がないため、受け止めてもらうことがなく、それゆえに「情動」の芽生えもないのです。ヒトである乳児は、「泣く」「空腹感」「抱っこしてほしい」という欲求、感覚が芽生えることによって、自己表現を行い、自信をもつのです。

例えば、3ヶ月の乳児が母親のおっぱいを求める姿があります。乳児は、生理的欲求である「空腹」を充足しようとする力を持っています。父親のおっぱいを求めるのではなく、母親のおっぱいによって「空腹」を充足しようとする力、すなわち感覚をもっているのです。このような乳児の自己の尊厳を意識しないで保育を行う時、保育者は、乳児の保育を、「生理的欲求を満たしてあげる」として捉えがちであり、「〇〇してあげなければ」と考えがちです。むしろ、保育者は、「乳児はしっかりと相手を選んでいる」ことに気付き、「好きな大人を選ぶことができる力」をどのようにして育てるのかということに思いを抱いてほしいと思います。

さらに、乳児は、この空腹を受け止めてくれたヒトを認識し、好きな大人として求めるようになります。受け止めてもらった乳児は、充足感という快の感覚が芽生え、微笑むようになる

のです。微笑みは人に与えられた神秘的なことであり、すばらしい人の力であると考えています。

乳幼児保育は「〇〇を楽しむ」という「ねらい」をよく見かけますが、本当に子どもは楽しんでいるのでしょうか。「微笑み」すなわち、「笑顔」「笑う」ことこそが、人と人との関係性に大きな役わりをはたしています。その最初が「微笑み反応」です。しかしながら、この「微笑み反応」は、その瞬間に大人が「笑った、笑った」と認識し、喜ぶことがあってこそ育ちます。大人の喜びが乳児の快という気持ちよさに連動するからです。

誰も反応がない場合、大人との関係性がない場合には「微笑み反応」は消失してしまいます。「笑わない乳幼児」になってしまうのです。好きな大人がいるとはこういう意味があります。乳幼児保育も子育ても、単なる基本的生活をする役割だけではありません。乳児保育における担当制もこの視点から考えることが大切です。同じクラスの部屋にしながら、「私の子ども」という保育者の取り込みが起こりえるからです。微笑みに応答することを目指すような担当制であってほしいと思います。

②乳児の空腹における情動交流「快」

乳児が「空腹」に対して「大きな声で泣く」のは、大人への依存です。自分ではどうしようもないから泣いて人を求めます。乳児保育は、自己の尊厳である自立と自立のための依存が融合しています。どちらか一方ではなく、この融合した考えをもって保育に当たることが大切です。

生まれて間もない乳児が、ひたすら母親のおっぱいを求めて肌に鼻や唇をこすりつけて探し求める姿は、いくら男女共同参画社会の現代といえども男性にはわからない母親ならではの子どもの威厳、尊厳を感じる瞬間ではないでしょうか。むしゃぶりつくように、おっぱいをちゅちゅと吸いながら小さな手で母親の肌にしがみつく我が子の姿に感動することはないでしょうか。母親としての至福の満足とこの時の「快の感覚」は、乳児から引き出される「母としてのまなざし」につながります。

母親は、妊娠中から、胎動の感動を味わい、胎児の頃からのつながりを持っています。乳児もまた胎児のときから母体を通した関わりを持っています。このヒトとして誕生するという自然界の摂理のすばらしさ、感性で感じる喜び、乳児と母親とのつながりがどのような意味を持っているのかを乳児保育では知っておかなければなりません。

一方、胎児のときに（事情はともあれ）、ヒトとして誕生することを望まれないで生まれた乳児の場合には、無表情な乳児である場合が多いのです。それは、胎児のときから命としての尊厳を認められなかったということにつながります。胎児のときから母親が尊厳をもって胎児を守り、守られる快を味わってきた乳児との違いは明らかです。極端に聞こえるかもしれませ

んが、乳児はヒトとしての尊厳を持って胎内で過ごしてこそ、自発性、すなわちヒトとして誕生したいと乳児自身が願って生きることにつながるのではないのでしょうか。大人は人の世界へ乳児をいざなう役割をもっています。子育てはここが要ではないのでしょうか。

乳児の保育は、乳児自身の尊厳を重視しなければ、子どもは自信をもって人として生きることが出来ないのです。乳児が自信をもって生きることが、ヒトとしての乳児の尊厳を認識することでもあります。

6ヶ月になると、乳児は同じ生理的欲求である空腹への満足であっても「ミルクの飲ませ方が気に入らない」と「いやいや」をして、乳首に噛み付いたり首をふったりします。乳児の情動が分化し、「嫌悪・恐怖」という感覚が芽生えるからです。すなわち、好きな大人から得ることが出来る「快」という情動は、気に入らないと「不快」として「いやいや」をする月齢です。一方、好きな大人に膝に乗せてもらい「ぽっかぽっか」とあやしてもらおうとキャッキヤと笑うようになります。

9ヶ月になると、見知らぬ人が来ると、「嫌」「恐怖」という「不快」から、好きな大人にしがみついていきます。これは、情動が分化して、「怖い」という感情が芽生えたことを示しています。一方、まだうまくは出来ませんが、9ヶ月ごろになると自分で口をふこうとしてタオルを口に持っていったりします。そばにいる好きな大人には、「うまいでしょ」と言わんばかりにじっとみつめてきます。「じょうず」というと、にっこりわらって得意そうにします。乳児は、情動が分化し、「快」は「得意」という感覚になって自己の尊厳や自信へとつながって行きます。

③他者に自己表現する 「みてみて」とアピール…

生後3ヶ月の乳児は、ヒトを求めてじっと見つめ、うっくんうっくんと声を発してヒトを求めます。また、「がらがら」のようなおもちゃを鳴らすと音が出ることに気づき、「もう1回」といわんばかりに手足をばたばたとさせます。乳児は、言語ではなく身体を使って他者に自己表現をしていきます。

6ヶ月を過ぎてはいはいが始まると、「泣く」ことで他者に自己表現していた乳児は、「はいはい」という自分で好きなところに移動できる力を使って自己表現をします。好きな大人の姿が見えないと不安そうに、時には泣きながら、はいはいをして探しに行きます。また乳児は時々とまって、「みてみて」といわんばかりに得意そうに「はいはい」をします。「はいはい」は、ヒトとの関係を求める自己充足であり、ヒトとの肯定的な関係作りのために乳児は自ら「はいはい」をしながら、他者を認識していきます。好きな大人に対して「はいはい」を行い、「みてみて」と大人を注視させようと自己表現をしているのです。「上手ね」と好きな大人に言わ

れたときのにつこり笑う満面の笑みは、乳児の自信の表れです。得意そうに、時々はわざと止まって「はいはいじょうずでしょ」といわんばかりです。

一方、9ヶ月ごろの乳児は、持っているおもちゃを好きな大人に「はい」と渡したり、相手から「はい」と手渡されたものをまた渡したりします。何回も繰り返しながら、人との交流を満足していきます。

9ヶ月近くなると、「このおもちゃがほしい」「おやつがほしい」というときには、「泣き脅し」を行う乳児もいます。すなわち、乳児は「他者の存在を認める力がある」と考えられます。乳児は、まだ十分な言語ではないが言語的表現をしていると考えられます。他者に自分の要求を求める姿は、他者への自己表現とも、非言語的表現ともいえます。

「乳児は表情で言葉を語る」といわれるように、「むずかる」・「喜ぶ」という感情が大人を動かす力になっています。言語的表現、「こうすればこうする」とわかって同じ行為をするのは、乳児の循環行為であり、繰り返す行為です。9ヶ月までの乳児は、言語化していく発達過程であり、あやしてくれる大人の役割は重要です。

9ヶ月になると少し言語が発せられるようになり、乳児は言語でヒトとの関係を作り始めます。例えば、空腹になると「まんま」と言って好きな大人に食事を催促するようになります。すなわち、生理的欲求である不快を解消するために、ヒトとの関係作りは始まっていくのです。指差しといわれる「指示行為」も少しずつはじまり、認知的機能が高まってきます。

乳幼児保育、特に子育てに直接関係する乳児保育は、乳児自身の力を信じていない場合が多く気になります。乳児自身のもてる力を信じてこそ乳児が人として育つことへの尊敬が始まり、関わり方や役割が変わっていくと考えます。乳児保育は基本的生活習慣さえ満たされれば良いわけではありません。遊びは「すきにしていよいよ」だけではないのです。乳児が気持ちよい「快」である笑顔や、乳児が「みてみて」といいたくなるような環境をつくるという視点が保育者には求められています。

④自己の尊敬

自己の尊敬とは、たとえ未成熟な乳児であったとしてもヒトとして尊敬し、ヒトとして関わるということです。自己の尊厳とは、乳児自身が胎児の時代からもっている潜在的な能力を敬うことです。大人が「一人ひとり」のヒトとしての力を信じることは、乳児がヒトとして自己の尊厳に気づき自己を肯定することにつながっていきます。ヒトとしての尊厳を守られた関わりをしてきた乳児は、他者に対しても尊厳を持って関わっていきます。また、自己表現を行っていきます。

一方、ヒトとしての尊厳を守られてこなかった乳児の場合は、ヒトとしての生命を尊敬されたことがないため、自己への肯定感や自信がなく、自分をどのように表現したらよいのかがわ

からないと考えられます。そのため、他者に対する尊厳や他者への自己表現がうまくいかない場合があります。乳児期にヒトとしての尊厳が守られることは、乳児保育における中核をなすことです。保育者が乳児と関わる時には、「保育者が何かをしてあげる」という視点からの脱却が求められています。

⑤情動交流と人の関係

このように考えると、乳幼児、特に乳児期の保育は、遊びや活動の中心に、情動・関係性の育ちを中核におく必要があると考えられます。乳幼児は、情動交流という人とのやり取りを通して成長するという考え方です。情動のキャッチボールを乳幼児と大人の間で繰り返し行うことを指しています。たとえば、「舌を出す」という模倣の行為は、自分から舌を出す場合がありますが、それは偶然です。その偶然が、大人との情動交流や関係性によって、たとえば、大人も舌を出すことによって、次の舌を出す行為が生じるということにつながっていきます。乳児がじっと目を見つめてくる時期がありますが、そのときに模倣の始まりです。

乳幼児保育の基本は、乳幼児の内的要求に即した保育者という人の応答です。明確にはいえませんが、人が応答する力は、かつて子育て中の親が自然に持っていることであったのかもしれませんが、近年、親の子育て力の低下が指摘されます。子育て中の親は、そうした力を持っていないのではなく、むしろ社会生活の中で人との関係性が希薄となった結果ではないかと考えるのは極端でしょうか。だからこそ、乳幼児保育は、人との情動交流や人との関係性の育ちを軸としていかなければならないのです。子育ての課題もまたそこに起因すると考えられます。

子どもは、この時期、前期に引き続き急速な発育・発達が見られる。六か月を過ぎると、身近な人の顔が分かり、あやしてもらおうと非常に喜ぶようになる。視野の中にある新しい刺激、変化に富む刺激、より複雑な刺激を次第に求める積極性や選択性は、初期から認められる。

しかし、六か月頃より、母体から得た免疫は次第に弱まり、感染症にかかりやすくなる。この時期の座る、はう、立つといった運動や姿勢の発達は、子どもの遊びや生活を変化させ、生活空間を大きく変え、直立歩行へと発展し、さらに、手の運動なども発達して、次第に手を用いるようになる。さらに、言葉が分かるようになり、離乳食から幼児食へと変化するによって、乳児期から幼児期への移行を迎える。

本来、子どもは生理的に未熟であり、体外の豊かで変化に富んだ応答的環境の中で生活することによって、人間として生まれながらに持っている能力を社会的な環境に適応させながらうまく発現していく必要があることから、この時期は、極めて大切である。

七か月頃から一人で座れるようになり、座った姿勢でも両手が自由に使えるようになる。

また、この時期には人見知りが激しくなるが、一方では、見慣れた人にはその身振りをまねて

「ニギニギ」をし、「ハイハイ」などをして積極的に関わりを持とうとする。この気持ちを大切に受け入れ応答することが情緒の安定にとって重要である。こうした大人との関係の中で喃語は変化に富み、ますます盛んになる。

九か月頃までには、ほうことや両手に物を持って打ちつけたり、たたき合わせたりすることができるようになる。身近な大人との強い信頼関係に基づく情緒の安定を基盤にして、探索活動が活発になってくる。また、情緒の表現、特に表情もはっきりしてきて、身近な人や欲しいものに興味を示し、自分から近づいていこうとするようになる。

さらに、簡単な言葉が理解できるようになり、自分の意思や欲求を身振りなどで伝えようとするようになる。

一歳前後には、つかまり立ち、伝い歩きもできるようになり、外への関心も高まり、手押し車を押したりすることを好むようになる。また、喃語も、会話らしい抑揚がつくようになり、次第にいくつかの身近な単語を話すようになる。

